

平成 27 年度第 1 回グローバル教育推進委員会議事録

1 日 時 平成 27 年 6 月 26 日（金） 9:00～11:30

2 場 所 高知会館（3階 会議室 飛鳥）

3 出席者

【委員】 葛城崇委員、坪谷ニューエル郁子委員、江原美明委員、長崎政浩委員、石筒覚委員、
中山雅需委員

【オブザーバー】

高知南中学校・高等学校 校長（谷岡）、副校長（廣瀬）

高知西高等学校 校長（松木）、教諭（井上）

【県教育委員会事務局】

小中学校課 課長補佐（今城）

高知県教育センター 所長（下司）、学校支援部長（岡本）、チーフ（武市）、
指導主事（南、田中、渡部）

高等学校課 課長（藤中）、企画監（坂本）、課長補佐（高野）、チーフ（松井）
指導主事・主査（市原・野中・阿野田・前野・久保）

4 協議事項

「高知南版グローバル教育プログラム（英語教育）について」

委員：

- ・ 6 年間のシラバスの見直しについて「研究主題に関わる視点」の詳細な説明をお願いしたい。

事務局：

- ・ 研究主題については、中学校と高等学校を資料の 1 枚目にまとめた。
例えば、「国際的な視点で物事を考える」や「積極的にコミュニケーションを図る」といった時に、
具体的にはどういうことなのかを英語科として解釈し、それに基づいて教材研究等に取り組み、
授業の中でしっかりと力をつける指導をしていくことを確認した。
- ・ 各自で取り組むのではなくチームとして取り組んでいくために夏休みにどういう視点があるのか
について意見を出し合い、今年度のシラバスを見直し、2 学期から明確な視点をもって授業を実
施したいと考えている。中学校では、「主体的に考える」については、相手が言ったことや読んだ
ことを理解しながら、自分の意見を持ち、それを他者に伝える活動を授業の中に位置づけて取り
組むことを考えているところだ。

委員：

- ・ 目標や視点をいう時に、英語科の先生方の話し合いの中で意見は出てきて、キーワードでも出て
くるが、授業の中の活動に落とし込められないと先に進みにくい側面があると思う。具体的には、
例えば文化や考え方の比較といった視点があった時に、授業ではどういう活動になるのか、生徒
は何をすればそういう力が身に付いて、最終的にはどういう姿になれば良いのかというような共
通理解が必要で、視点といったときに、何を見るのか、その見る対象物がはっきりした方が良い
のではないかと思う。要するに活動が想定されれば良いのではと思った。
- ・ 中学校の「話す活動を中心」に「4 つのルール徹底」については、例えば、アイコンタクトに

しても、相手が分かっているかどうかを確認しながら伝えたいという気持ちをきちんと持って伝えるということが、この4つの活動に表出していると思う。先生が大事だからこの4つを教えましょうというのではなく、相手に伝わるように何とか伝えようとすると、こういうことが自然に出てくるというような視点が大事だと思う。まとめると視点といった時に、どういう活動で何ができれば良しとするのか、授業で5分間これをやってみようとか10分間やってみようということになるので、そうすれば少し具体的に動いていけて先生方の不安も少なくなるのではないかと思った。

委員：

- ・6年間のシラバスの中学校1年と2年を見直すのはなぜか。また、どういう見直しをするのか。

事務局：

- ・昨年作成した6年間のシラバスに沿って、どの学年も実践していくが、このシラバスは、現在の中学校1年生が各々の学年に進級した学びの継続をイメージして作成されたものであるため、今年度は、特に中学1年生と2年生に重点を置いて取り組み、中学1年次と2年次のシラバスを中心に見直すことにしている。年度末に、アンケート等で付けた力を付けられたかを確認し、より丁寧に指導しなくてはいけないことや更にできると考えられることなどを整理して、シラバスの見直しをしたい。

委員：

- ・良いシラバスができたと思う。今回、あらためて昨年議論した内容を見直したが、これまでの会でも、委員から『何ができれば良しとするのか、どうなったらエクセレントと言うのか』という発言があったが、今回、その具体例が分かるような事例があれば教えて欲しい。

事務局：

- ・各学年で設定した力を付けていくためには、学校として年間指導計画において、各単元でどのような力を身に付けさせるのかを明確にして取り組んでいくことが大切である。各単元でどのように取り組むのか、また、「話すこと」と「書くこと」について、どの指導事項に重点を置くのかを明確にして、その学年や単元で力が付くようにする。7月の中学1年生の授業において、街で会った外国人に質問できるように質問集を作る予定。実際に中学1年段階の英語「what・how」を用いて質問を考える中で、相手意識や伝える目的を理解させた上で、話す力を付けようと考えている。

委員：

- ・英語科の教科会を毎週実施しているのは素晴らしい。研究主題として日々の中からテーマを見出そうとしているのも素晴らしい。
- ・質問を2点。これを実現するために、教科会はどのような計画を立てているのか。教科会が校種別ということだが、中高が顔を合わせる教科会はどれ位の頻度で開催しているのか。

事務局：

- ・7月に評価方法については合同で実施する予定である。CAN-DO リストやパフォーマンステスト、定期テストにおける評価の視点が実際の授業と結び付くように考えていく。夏休みには、シラバ

スの見直し、発表会の学習指導案の検討、7月と12月に実施する意識調査の項目の検討を考えている。生徒の英語学習に関する意識調査は、先生方からの要望もあり、中学校入学前の英語学習への思いやどのような授業を受けたいか、その学習スタイル、また、難しいと思うところを問うような内容で検討している。この調査から得られた生徒たちの強みや弱みについて、担当の教員がどのように受け止め、どのような授業づくりをするかを検討する計画である。

- ・中学校と高校は、現実的には互いに授業を見合うことや合同の教科会の設定が時間割の関係で難しい状況であるため、指導主事がつなぎ役をしている。

オブザーバー：

- ・教科会について補足を申し上げる。教科会は中高全体で持てるように時間割を組んでいるが、今年度、英語は15人の教員がおり、そのうち初任者が中高一名ずつ配置されているため校内・外の初任者研修や進路補習等で時間割が合わない。このため、全体で集まることができないことから、長期休業中や時間外で全体の教科会を持つようにしている状況である。中学、高校と分かれるが、英語は教科会を確実に持てるようにしている。来年は初任者の配置等にもよるが、全体で組めるように考えている。

委員：

- ・教科会については、日々の授業実践からというところを大切に、もちろん先生方の伝えたいことや情報を与えたいことも沢山あると思うが、やはり先生方の実践を大事にして、それが良い方向にいくような形の研修を考え、質を上げていくことを是非実施して欲しい。

委員：

- ・質問と言うより意見だが、グローバル教育という観点で見ていく時に、今回英語学習と探究学習の二つが並んでおり、そこをどういう風にリンクさせていくかということがあると思う。英語教育プログラムの目標に掲げられている内容、特に外国語科研究主題と書いてある内容、これはほぼ探究型学習でも同じことが言える。特に中学校の「主体的に考え、積極的にコミュニケーションを図る」は、英語だけの問題ではなく、他の教科でも全て当てはまる。当然、探究型学習もこれが必要となってくるので、そういったところの教科全体の共有の仕方を考え、英語科の先生だけでなく、国語科や社会科の先生も理解してもらう必要がある。例えば、4つのルールにしても、英語でやっても国語ではやらないという事態ではよくない。国語や社会でもアイコンタクトやジェスチャーを踏まえたコミュニケーションがなされる。今回、探究型学習を各教科で取り組む際には、相互に英語の授業とリンクしながらやるとよいと思う。主体的に考えるということは、英語だけではなく、他の科目でも出てくる。今後は、体制としてそれを横で繋ぐのは難しいことは分かっているが、一方でグローバル教育という観点で見ると、そこができてこない生徒自身は英語は英語、国語は国語という風に必ずしも見られていなくて、国語で考えた内容は英語で出てきても良い。「グローバルなので」、「社会の求めだから」といったところを、今後どういう風にお互いに生かしていくか。少なくとも情報共有は必要であり、今後は科が違う先生方で共通の教材を作成してやってみようとかそういった場が必要となると思う。これは、今後グローバル教育プログラムをやっていく中で、これらの教科の枠組と有効事例の枠組みを、担当の先生方と外国語担当と教育センターの研究担当が中心になって作っていく枠組み・仕組みだと感じた。

委員：

- ・これも大事な視点だと思う。やはり、英語だけの主題に終わるのではなく全体を通した学校全体の取り組みの中で、英語を主体に考えていく、お互いの横軸を考えていくということが大事だ。

委員：

- ・同じことを感じていた。次の段階として、どのように他の教科との繋がりを持っていくのか、いわゆる学際的な取り組みの必要性があるのかなと思う。教科とその横軸との関連性、これを互いに共通認識として話し合いをしていくという場が必要だ。
- ・もうひとつは、生徒のモチベーション。これをどの様な形で上げていくのか、もう少し具体的に考えていった方がよい。生徒にとって、年齢的にも反抗期で、「何で勉強しなくてはならないのか」とか「勉強しても使う必要もないのだからやる気ないよ」といった声が出る可能性もある。そこで、やはりモチベーションを上げる仕掛け、これをいくつかの案を考えたらよいのではと思う。

委員：

- ・現在、取り組む中で困っていることなどがあれば、事務局から意見を出すように。

事務局：

- ・困っていることと言えば当初不安があった。しかし、英語科の先生方は前向きである。また、研究主題については、英語科だけでなく他の教科にもつなげながら、高校も含めてみんなでグローバルの視点で取り組んでいくという声も出た。
- ・モチベーションについては、中学 1 年生では単語をいくつか言えたかや早く言えたかなど活動にゲーム性を持たすことで、やる気を持って活動に取り組んでいる。実際に早く読めたなど手を挙げている生徒の中には、できていないのに手を挙げている生徒もいるため、活動の目的を生徒に意識させ、今すぐに成果が出なくても取り組み続ければ、その先では力がつくことを伝えて、頑張らせたい。活動の評価目標を伝えることも大切である。モチベーションをどのように持たせるかも重要だと感じている。
- ・本年度の 5 月に中学校 3 年生がアメリカの留学生に対して高知についてのプレゼンを行った。その際には、留学生に対して英語で質問する姿があり、生徒たちには英語を使いたい意欲があると感じた。

委員：

- ・高等学校の先生方の授業を見せていただく機会も多いのだが、逆にディモチベーション（モチベーションが下がる）の場合はどんな場合かを考えると、まず先生が教科書の内容の事実質問ばかりし続ける、生徒が座ってばかりで動きが無い、50 分授業で休みが無い、つまり、途中で先生からの余談が無い、教室に生徒の声が聞こえる割合が少ない、などがある。やはり生徒にはそんなに先のことは見えない。生徒にとってはその時間が楽しめなくては英語が嫌いになってしまう。そういう点では、今言ったことの逆で、楽しい場面が何かと言うと、生徒の発言に反応して他の生徒たちが盛り上がりたりする、といったことがある。あるいは、生徒が先生の顔だけを見ているのではなくペアワークなどお互いの顔を見る場面がある。そういう風に色々あると思うが、先ほどの発言にもあったように、日々の授業で少しずつ、こういう時に皆が輝くのかといった非常に身近なところから意欲がのびるのだと思う。

委員：

- ・英語は「分かる」から「できる」というのが、他の科目と比べると感じやすい科目だと思う。
- ・ひとつは動きを取り入れて気付ける点もあるし、もうひとつは自分の使った英語が相手に通じたということが何となく反応で分かると同時に、それがものすごく嬉しい。
- ・帰国子女でない限り、始めから流暢な英語は難しいと思う。ただし、流暢な英語でなくても自分の考えを伝えることが出来るようになる。リスニングにしても今まで全然聞き取れなかったものが、何となく相手の言っていることが聞けるようになる。「分かる」から「できる」という確信が自分でも感じ取れる科目であり、それがモチベーションに繋がる。それをいかに授業の活動の中に取り入れるのかというのがポイントである。身近にいる ALT の様なネイティブの外国人との共同・連携が生徒の気付きへ繋がるヒントとなるのではないか。

「高知南版グローバル教育プログラム（探究型学習）について」

委員：

- ・今年度のスケジュールについて具体的に国語と数学の事例があったが、中学校もしくは高校の教科の授業の中で試行することや、別の時間帯に時間をつくって授業運営したりしているが、その方法を教えて欲しい。

事務局：

- ・現時点では、教科の授業によって知識構成型ジグソー法を実践することを中心に取り組んでいる。その一方で、本校はキャリア教育の取り組みを長年継続しているところで、キャリア教育の中では教科横断的な取り組みも進めている。

オブザーバー：

- ・今年に入り、知識構成型ジグソー法を活用した授業を、中学校と高等学校それぞれ7時間の合計14時間行っている。教科は、基本的には国語と社会を中心に取り組んでいる。

事務局：

- ・先ほどの回答の補足をする。授業そのものは試行というより、通常の教科の学習である。年間計画の中に位置づけられている授業の単元において、現時点で14時間の知識構成型ジグソー法の授業を行っている。そのうち1時間は、中学3年生の高校体験授業として、正規の教育課程とは別の授業を行った。

委員：

- ・探究型学習というのは「内省」と対になっている。探究をしている最中や終わった時点でも、「この問いに対して自分たちはどこまで探究できたのであろうか」「もっと深く探究していくためにはどのようにしていけばよいのだろうか」などと、このような視点をきっちりと植え付けていかなければ、探究型学習はやりっ放しで終わってしまう。内省の癖を付けるというのがとても大切であるが、その視点が少し欠けているという気がする。もうひとつは、実際に探究型学習に取り組む際に、スキルとの結び付けについて意識付けさせるということである。例えば、スキルといえば、コラボレーションとか、問題解決能力であるとか、自己管理能力であるとか、色々なスキルがあるかと思うが、常に教員は今あなたがこれを挑んでいるのは、これによって問題解決能

力のスキルをもっと学ぶことができるからだとか、そういった形でスキルを意識させていくことと、この2点が必要かと思う。特に内省はペアなので忘れないように。

委員：

- ・内省を忘れないこと、意識すること。筋肉トレーニングでも、ただ運動するのではなく、その箇所の筋肉を鍛えているのだなと意識してやることは大事だ。

委員：

- ・内省ということでは、教員研修でのアクションリサーチがある。内省つまりリフレクションをするのだが、難しいのは教員の側で何をどういう視点で内省するのかある程度見通しが無いとうまくいかないということだ。教員が指導の過程である程度見通しがあった方がよい。その見通しを持つためには、やはりスキルという話があったが、これとこれがこの活動では特に大事なスキルだというようなことが無いと効果的でないと思う。その辺は大変だとは思いますが、教育実践を学びながら行うという意識で取り組むと、教員も楽しめるのではないかと。

事務局：

- ・内省は大事である。知識構成型ジグソー法という授業の型に関しては、グループ活動を取り入れることによって生徒一人一人学びをいかに深めていくか、アクティブ・ラーニングとなるようにどのように繋げていくかが肝要なところである。その視点を授業づくりや教材づくり、授業アンケート等にしっかりと落とし込んでいくことが必要と考える。また、生徒が最初の課題を考えた結果が、それで終わることなく次の課題に向かって繋がっていくという構造をしているのが、この学習の特徴である。学習効果をいっそう高めるためには、しっかりとした単元構想や全体の繋がりの意識を授業者が持って、「この学習でどういう力を身につけていくのか」という視点で研究を進めていかなければならないと考えている。そういう意味で、学習の目標をしっかりと立てることと、それに対する評価の方法というのを学校全体の中でも大きな課題として取り組んでいるところである。先ほどからの話や意見を大いに参考として、今後の研究の中心としていきたいと考えている。

委員：

- ・補足する。先ほど内省をさせるためには、教員側で、ある程度見通しが無ければいけないと述べたが、誤解を招くといけない。知識構成型というコンセプトは、元々先生が知っている人で、生徒が知らない人、そしてその知らない人に知識を注入する、という考え方ではない。ある程度、先生に見通しが立っている部分を、もちろんと生徒と先生で知識を構成していくということを大事にしたい。

委員：

- ・過去の研修を振り返ると、先生であっても効果的な内省をするのはすごく難しいというのが結果である。様々なデータを取りまとめたが、そこで何が背景にあるのかということ深く考えるのはかなり難しいと実感した。そういう意味で先生の役割というのがメンターとしてその思考を助けてあげるといって重要な役割を果たすと思うので、こういう形で主体的な学習をしようと、多くの場合は放任というか、生徒たちの主体的な学習におんぶして先生が役割を果たさない

という図式をよく見てしまう。従来の知識伝達型よりもはるかにしんどい、はるかに生徒のことを深く知って、よく理解していないと適切なフィードバックを与えることはできない。先ほどの発言にもあったように、先生の果たす役割は、何かを与えるということではなく、生徒たちの思考を助けるという、はるかに重要な役割を果たすことだと思う。

委員：

- ・そういう大変さもあるということだが、何かヒントや手がかりなど具体的なアドバイスがあればお願いしたい。

委員：

- ・この4月に開設された地域協働学部だが、実習が最初からかなり入っている。内省というか振り返りの時間を、専門科目を削ってでも多く取っている形だ。そこに教員が指導ではなく、寄り添う様な形で学生一人一人の理解にいかにかき合わせるかというところを大切にしている。これは解決策ではないが、こういう時間をどう取るかというのが課題である。大学だからできたのかもしれないが、あまり効率的にやろうとすると上手くいかない部分もある。これは多少ジレンマだがこういう活動が増えれば増えるほど内省する時間も必要になってきて、段々活動がP→D、P→Dみたいになっていきがちである。後は、先生方のこれまでの教育スタイルと違っている部分があるため、それぞれの生徒や学生の考え方にある程度入っていきながら一緒になって更正していくようなところが必要となる。やはり時間の取り方、一方で個人個人が文書できちんと振り返る力を持つなど、やり方は色々ある。活動後に、活動を経て自分の中でどういう風に深めていくのか。恐らく一人一人 face to face でやる時間は取れないと思うので、それを生徒同士で深めていく方法と、個人ワークの中で深めていく方法も同時に考えていくことである。どの活動が一番よいのかというのは現場の先生が体感しながらつくっていくのが一番よいと思う。そこを行わないまま次に行くと、段々ワークは楽しいけど振り返りは楽しくないとなっていく。深まらないままアクションだけが起きていく。これまで大学でも失敗したこともある。時間・体制の中で、どこかでやり方を決めてやっていくことになる。そこに次の世代が入ってくると、そのやり方では中々上手くいかないと、次々と研修して改善していくような形になる。取り組みだと先生方は、実はこういうことをしたかったとなる場合もある。時間の作り方を管理職が工夫して、仕組みができればよいと思う。

オブザーバー：

- ・探究型学習とセットで内省というのは非常に重要だと思っている。
- ・本校の探究型学習では、探究とディスカッションをセットにして取り組んでいる。ディスカッションをセットにした理由は、生徒同士が討議するにあたって、生徒自身が内省しないまま討議はできないと考えたからだ。自分が意見を言う前には、自分の中での振り返りがあり、まとめがあるはずである。また、何かに取り組む場合は協働しなければ事は進まないため、内省プラス協働という形の討議をやらしてはどうかと考えて活動に組み込んでいる。今までの経験からこのような2つのことを考え取組んでいるが、アドバイス等お願いしたい。

委員：

- ・ひとつは生徒同士による内容の深め方だと思う。高知大学でも同じで、明確な答えは持っていない

い。その後、評価が入ってきて難しくなる。内省のプロセスに教員がどのように関わるかについては、「ディスカッションでこういう意見が出ました」「上手く発表しました」では十分ではない。どのようにすればよいかについては、明確に見えておらず試行錯誤中である。

委員：

- ・まさに内省をしている状態。

委員：

- ・ディスカッションというのは手法の一つであって、ペアワークや自分で発表していく場合やプレゼンテーションという形でアウトプットしていく場合もあり、色んな方法があると思う。内省というのは、常に今日の授業や今やっていること、この学期や年度でやったことを常に立ち止まって本人やペア、クラス全体でもよいが、「どこまで調べ切ったのか」「どこまで考え切ったのか」「もっと考えるためにはどんな手法があったのか」などについて冷静に考えていく癖を付けることが重要である。そして、その付いた癖を次の時はここまでゴール設定を上げてみようとやっていくことである。ここでディスカッションもプレゼンテーションも色んな手段があって、アウトプットは多くの手法があるので大いに試してもらいたい。

委員：

- ・現在、教育委員会の中では深掘りがテーマとなっている。

オブザーバー：

- ・ひとつ質問をしたい。知識構成型ジグソー法という手法を今現在、高知南中・高等学校は取り組んでいるところだが、知識構成型ジグソー法そのものの手法が、内省をさせていくようなシステムになっている。最初に〇〇についてどう思うかという課題を先にさせて、ジグソーを使って勉強をした後、最後に同じ質問をした場合に生徒がどういう風に変わっていくのか。ただコミュニケーションをして、それを発表するというのではなく、色んな人の考えを聞いて新たなものをつくり出していき、そして、それを最後発表するという方法を取っている。今はカリキュラムに沿ってやっているが、他に更に一ヶ月後に同じテーマでやればよいのか、どのようにタイミングを計りながらやっていけばよいのかなど、何かよい例があれば教えて欲しい。

委員：

- ・同じ内容やトピックを別の機会で行っていくというが、それは両面あると思う。生徒自身は同じような話題が来ると飽きてしまうかもしれない。ある一定期間を置いた時に、同じものに対して何かをやったことによって明らかに深まっているなど、複数の知識が入って、とにかく竹取物語を見てみたら違う視点が生まれているのが明らかに分かり、自分たちの能力やスキルの上達を確認できるのであればやってみてもよいと思う。同じ内容を違う教科で扱い、もう一回戻ってきたなどもよい。例えば環境問題を国語の視点、社会の視点、理科の視点で行って、それが、もう一回各方面にやってきた時に違う視点が入っていれば、同じパターンの知識構成型ジグソー法で内容が変わっていない活動でもよい。それで生徒が変わってきたら、生徒自身が自分の知識イコール統合して力が付いているとの確認にもなると思うのでそれは効果的といえる。

委員：

- ・知識構成型ジグソー法は非常によく考えられたプログラム。そこに興味を持つ一方、これは一つの方法であって、大きな図式として、例えば国語でこの知識構成型ジグソー法をやることで授業が変わって色々探究的な学びができるようになることもあると思う。私は自分の授業で毎回最初に、英語でも日本語でもよいから一番印象深かった本について聞いているが、多くの学生が高校時代も大学入学後も本を読んでいないという。読んだものは教科書やセンター試験に載っている論説文等と言う。本を読まずに、例えば国語の授業の中で太宰治の本を何冊か読んで何か考えるとか探究するというのはイメージとして分かるが、果たして限られた教材の中だけでやるのが探究型学習といってよいのか。是非、ひとつの単元だけでなく、その教科のゴールとしての探究とはどういうことなのかということの頭の片隅において考えてほしい。

オブザーバー：

- ・探究に限らずだが、学校の取組状況を総体的に報告したい。ひとつは昨年度2月10日のこの会で英語ルームと生徒のモチベーションの話題があったので、現在場所を確定して中身を詰めて、何とか開設したいと考えている。今年はALTが二名体制から三名体制となった。特に中学校の英語の授業を見ているとALTが加わった授業が多くなっていると感じている。ALTの役割について、一時間の授業の中で導入、連帯、整理の三段階で考えて、授業者と役割分担をするようにして、子どもたちの英語に関わるモチベーションを上げるような仕組みをつくっているところである。探究型については、本校は先進県の埼玉県や広島県等の実践から学んで取り組んでいる。ただ、核になる教員をつくるという形ではなく教育センターの常駐指導主事と連携しつつ、全体で取り組んでいる。教科への落とし込みも工夫をしながら14回の実践事例があり玉石混合だったが、ジグソーを試したいという教員の気持ちを大事にしている。授業者自体が今後の改善点を見出しているので、教員のモチベーションを上げていき高知県全体に普及できるようなモデルあるいは実践事例を作り上げたいと考えている。11月5日には研究報告をする。授業も年一回は公開する。臨時教員を中心とした若い教員の授業改善を促していきたい。そんな中でタブレットパソコンを活用した授業や、知識構成型ジグソー法の授業に若手教員も積極的に取り組んでいるので、そうした機運を組織として広げて精度を上げていきたいと考えている。

5 情報提供

「中高一貫校におけるMYP導入の勧めについて」

委員：

○MYPについての提言

- ・自分で決定できる人間を目指す。
- ・自分たちで社会貢献をしていきたいとなっていく教育プログラム
- ・教科融合型がMYP。学際的。
- ・国際バカロレア認定校200校を目指すとなる過程においても、元々DPだけの導入ではどれだけ効果があるかは、はなはだ疑問であると文部科学省には申し立てていた。
- ・MYPからの導入を文科省に強く進めている。英語が母国語でない国はMYPを導入している。
- ・MYPからDPに進まない生徒も国際バカロレアの神髄が理解できる生徒が育っている。例で言えば、慶応大学ならどの学科でもよいではなくて、イルカの研究をしたので、どこの大学に行きたいという生徒が育つ。

- ・何故、DPだけなのか当初から疑問に思っていた。是非、MYPから導入して、MYP、DPにつながる真のグローバル教育を進めてほしい。次回の会議には、決定したといううれしいニュースを聞きたい。

オブザーバー：

- ・視察で先進校をいろいろ見てきたが、高知発の国際バカロレアをどう作るのか。私立のようにお金、人をかけられるのか。県立校でどこまでできるのか。
- ・関西で、国際バカロレア校のどこに子供を行かせるか探している母親を見た。高知にも移住者に来てもらえるような学校にしたい。
- ・質問として、MYPの中に必ずやるパーソナルプロジェクトは、EEにもつながる。これについては、高知らしさを出せると考える。

委員：

- ・DPは、12日間のアナログの試験代、電卓費用などお金がかかる。
- ・MYPはお金がかからない。申請したらすぐに授業展開でき、認定を受けるまでに研究した後に認定できる。MYPからの導入は安いし、導入しやすい。パーソナルプロジェクトとなり、高校1年の最後に自分で課題を選んでもできる。自分で選んだ科目で、上級コースにつながり、大学へつながる連帯性のあるもの。何を選ぶか心理学、経済、経営などを学んでいくことになる。

オブザーバー：

- ・企業と連携して後押しをしてもらうためには？事例などあれば。

委員：

- ・大いに研究して、一緒に組ましてもらえればと思う。

事務局：

- ・前段の提言型、英語教育プログラムの教科横断型の横串の話。今のMYPの話は、まさにMYPのやり方を学ぶところにあるのかなと感じる。
- ・5つのテーマと8つの教科との関連でしっかり組み合わせ、どういう組織で進めていくのか。

委員：

- ・5つのテーマ例えば、「子どもの労働」というテーマを取り上げたとき、どこから入るか、それに関する科目は、国語、外国語、歴史、地理も入る。入ってきやすい科目を選択し、科目間の先生と協議し、学際的に詰めていく。
- ・方向性は同じ。MYPは系統だって非常に良くできているプログラムである。中途半端でなく、しっかりとこの提言を真剣に受け止めてもらいたい。
- ・MYPの正式決定のメールが届くことを待っている。

事務局：

- ・外部評価と取り入れたシステムとは。

委員：

- ・インターネット上で外部評価ができる。内部評価も抜き打ちで行う。あまりにも厳しい又は甘い評価をしているとスタンダードな評価は何か、と問われることになる。
- ・世界中の評定で、どこの位置にあるのかを把握できる利点がある。外部評価委員が 5 千人いる。それぞれを評価していく。

委員：

- ・例えば、数学と 5 つのテーマのかかわりでいえば、どうなるのか？

委員：

- ・数学的に考えたところは必ず出てくる。未来の予測は必要。是非ともかかわらせながらやることになる。
- ・例えば、「子どもと労働」であれば、人口比率、経済的状況でどのように変化してきたか、していくのか。その中で微分、積分を取り込んでいく。「子どもと労働」というレンズを通して、微分、積分を学んでいく。生徒たちはそれによって学びを拡張していく。

委員：

- ・「共同体」が一つのキーワードになる。今、高知大学ではまさにこれをやっている。本来、小中高でやることであるが。
- ・共同体の一員である意識が薄れている。共同体の外側に自分を置きたがる。実態があることを学びながら、共同体の一員に置くことが重要となる。
- ・MYP ではどのようにそれに取り組むのか。

委員：

- ・「子どもと労働」なら、私たちにはその問題に対して、何ができるのか。どういう責任があるのか。どういう立場をとっていくのか。自分たちがその問題に積極的にかかわれるように、具現化し、活力につなげていくことが特徴。
- ・これらを通じて共同体の中に自分たちは存在する意識を植え付けられる。こういうことを生涯学習し、より世界を平和にしていく。共同体の最小単位である家庭から、集落、市町村、高知県、四国、日本、世界、宇宙と広がる視点を持つ中で、高知の一員なんだという意識が生まれやすいプログラム。
- ・高知らしさ、共同体として作りやすい、協力しやすいのではないか。大学もそれに依存している。

委員：

- ・5 つのテーマがキーポイントになる。
- ・「学習の姿勢」、「人間の創造性」、「共同体と奉仕」、「多様な環境」、「健康と社会教育」の 5 つのテーマの中で、「人間の創造性」をテーマにした時に、具体例はどんなものがあるか。

委員：

- ・様々なテーマがありすぎて直に浮かばないくらいである。過去における出来事で、現在、未来に及ぼす。例えば、電気、力の発明。人間が作ってきたもの、どのような形、生活、心に影響を受

けたのか。私たちがものを作っていくときには、これを考えていく必要がある。「今の行動は未来に影響を与えている」というのがこのテーマの観点。

6 報告事項

「スーパーグローバルハイスクール（SGH）事業の進捗状況について」

オブザーバー：

- ・海外活動について、今の1年生はSGHを知らずに入ってきている。海外3つのコースで23名の定員に50名弱の応募があり、厳しい選考を行った。何を海外でリサーチしたいのか、明日までに論文を書くということと、面接では英語で発表し、聞くということを行った。
- ・事業の評価については、生徒のアンケートから見て取れる意欲、能力は何に起因するのかをつかんで伸ばしていけるのかを考えている。
- ・SGHのホームページ作成については、プロの手を借りながら準備している。

委員：

- ・多読、多聴の授業はどうか。

オブザーバー：

- ・タブレット活動などで週1回は全員多読を行っている。書くのは、月100語以上から週100語以上に単純に回数が増と1年生は質より量を重視している。

委員：

- ・量は不足していたのでそれでよい。多読は書き直されたペーパーバックではおもしろくないので、質のいいものにふれさせることも大事。時間をかけて良書を集めてほしい。ある程度、正確さを犠牲にして、ねらいを持って正確さを上げるバランスを取ってほしい。

オブザーバー：

- ・生徒たちが、もがくことが今までなかった。分かっているできる範囲しかやらないのではなく、わからないことにぶつかることが重要と感じている。

委員：

- ・プレゼンテーションの最初の頃とその後のすばらしいものを蓄積して、映像のポートフォリオがあれば公開イベントなどでインパクトになる。中学生が見るのにも自分の成長が確認できて励みになる。

委員：

- ・SGHは、他の事業のいいとこどりをしている。英語、探究、バカロレアの要素を入れている。多読、多聴でこれをテーマにこれを行っている意識しながら、やる楽しみを感じられるようにするとよい。